

プレッシャーの正体

校 長 武井 正明

名古屋場所の横綱、大の里が苦境に立たされている。

初日は見ていられなかった。土俵入りの段階から、見る側がそういう気持ちだからなのかもしれないが眼も虚ろ、いかにも不安な気持ちが表情に滲み出ている。

その悪い予感当たった。

立ち合いこそ良かったが、引いて叩こうとする悪癖が顔を出し、天敵義ノ富士に痛い一敗を喫し2日目も連敗。3日目待望の初日が出たものの、昨日また負けた。

弱冠25歳で横綱となった大の里は、既に自らの進退は自分で決めねばならない立場にある。先場所は全休、今場所は後がない。横綱という地位は重く、孤高の存在である。天国の親父よ、千秋楽まで横綱を護ってくれ…。

重圧を感じながらの、という点で、今年の吉中野球部（YBC）の歩みに敬意を表したい。彼らの新チーム始動は北信越大会後、つまり県内で最も遅かったわけなのだから。

そこから現王者として県内強豪校の厳しいマークを受けながら、よくぞここまで勝ち上がってきた。試合運びの安定感や勝負強さが、春先よりも格段に進化した感がある。

12日鳥屋野BCとの再戦。一度勝っているだけに、大敵だったのは無意識に自分に懸けるプレッシャーだと、容易に推測できた。しかしナインの全く隙のない表情から、私はまず勝利は動かないだろうと信じていた。

「18日は一日空けてあるから明日は頼んだぞ!!」と声を掛けると、ナインは口々に「任せてください!!」精悍な眼で、頼もしい言葉が返ってきた。

そして迎えた鳥屋野戦、ピンチを凌ぎチャンスをモノにし、一度もリードを許すことなく、見事4-1で勝利を飾った。その勇姿は、昨年先輩たちと重なってくる。

ひとつひとつ積み上げてきた北信越までの石は、あと1個というところまできた。



明後日はいよいよ運命の日。

試合では、いかに無心になれるか。ひたすら目の前のプレーに集中あるのみだ。

プレッシャーの正体とは何だ？

「～ねばならない」という自分の内にある呪縛のハードルに他ならない、敵は己自身にある。

その時まであなたが何を積み重ねてきたのか。その日々を、自分自身を信じることができるか。君たちは何度も涙を流し、そこから這い上がってきた。

「執念と冷静さ」静かに燃えて、最後はウチがもらう!! 皆で勝って泣こうじゃないか!!